火の河 下

大林 清

東京文藝社

火の河（下）

四二〇円

昭和三十八年十一月二十五日印刷
昭和三十八年十一月三十日発行

著作者　大林　清

発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・（二六〇）二五五〇

火の河（下）

目次

北陸の女　五
人間として　二五
後門の虎　四〇
高原春色　五七
告白　七一
待ち人　八五
山国　一〇四
別れしばし　一二三
同じ空の下で　一三六
檻　一五二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

絶望　一六四
逃走　一七三
交換条件　一九六
焦躁　二二三
雨ぞ降る　二三八
恋物語　二四一
西と東　二六一
霧の中　二七六
詐謀　二八八
火消えず　二九九

北陸の女

「まだ北海道じゃこれから桜が咲くんだよ。今年はお蔭で二度花見が出来る訳だ」

田浦がそう言って、札幌へ出張して行ったのは、四月の下旬だった。

出張の用務は東西観光バスが北海道に新観光路線を作る下準備で、田浦は本来が宣伝担当だが、重役中の最年少なので、とかく機動性を必要とする仕事には引張り出されると言うことだった。

結婚以来、夜の来るのを恐れて、暮らして来た里津子は、田浦が出張中の十日間は、ともかくも安心して眠れるので、田浦を家から送り出してしまうと、久し振りで自分のからだにかえった気がした。

その日の夕方、自分の部屋にいた里津子に、女中が電話を伝えて来た。

「旦那様はご旅行中だと言いましたら、それなら奥様にお願いしたいって言うんです。お名前はってきいたんですけど、ともかく奥様にお願いしますって言うだけで……」

里津子は何の気もなく、電話口へ出た。

――わたし友成と言う者で、ご主人はよくご存じなんですが……。

相手は中年の感じの男の声だった。

「どう言うご用件でしょうか」

里津子は何か曰くのありそうな電話なのを直感した。

――実は至急ご主人にお願いがあってお電話したんですが、十日間のご出張だそうで、十日後では間に合わないものですから……。

相手はそこでまたプツリと言葉を切った。里津子を呼び出したものの、用件を話したものかどうか迷っている様子である。

「どうぞあたくしでわかることでしたらおっしゃって下さいませんか」

――電話ではちょっとお話しにくいことなんで、よろしかったらちょっとお宅へうかがいたいんですが……。

「いらしって下さってもよろしいですけど……」

見知らぬ客と会うのは好ましくなかったし、どうせ田浦に関する用件は聞いてもわからないだろうと思ったが、拒むことも出来なかった。

――ではこれからお邪魔させてもらいます、ほんの十分もお目にかかれば結構なんです。

男はそう言って電話を切った。

受話器を置いた途端、里津子は友成と言う名の記憶を呼びさまされた。

宮崎のホテルで、田浦の口から聞いた名である。それ以来一度も思い出したことがなかったが、やはり意識の底に沈潜していたのだろう。

友成早智子――田浦がついこの間まで世話していたと言う柳橋の芸者だった。

友成と言う同じ姓を名乗ったところから察しると、電話の男はその女と血縁の者なのだろうか。

それから十分もしないうち、女中が来客をしらせて来た。

友成という名の男は、声よりも見た感じの方が若かった。一応の服装はしているが、ワイシャツの衿は垢じみ、全体にどことなく貧相な感じがつきまとっていた。
「突然お訪ねして申し訳ありません」
友成は応接間の椅子から立ちあがり、落着きなく眼を動かしながら頭を下げた。
里津子はこの客をどんな風に扱っていいかわからず、目礼だけして対座した。
里津子がだまっていると、相手もどこから話の絲口を引き出したらいいものか迷うようにだまっていた。
「ご用件をうかがわせていただきましょうか」
里津子の方からうながした。
「はア、実は奥様にお話しすべき筋合いのことではないのですが、わたしの妹に早智子と言う者がいまして、柳橋で芸者をしておったのです」
里津子の想像はあたっていた。
「その方のことなら聞いております」
「お聞きになっている……」
友成は眼をみはった。もし新妻の前にその夫の不行跡を暴露して、何か言いがかりをつけることが目的で来たのだったら、あてのはずれた顔をしそうなものだが、
「それならばお話がしいいです」
と、相手はむしろ気が楽になったように緊張を解いた。

「じゃア妹に子供のあることもご存じなんですか」
「はい」
里津子はひとごとのように答えた。
友成があらためて里津子を見まもったのは、何故そんなに平気でいられるのかと不審に思ったからだろう。
「そうですか、それなら何もかもご存じなんですな。妹は子供が出来てから、ご主人に面倒をみていただいていたんですが、去年の暮手を切って郷里の富山へ帰りました。その時ご主人は何でも希望通りしてやるとおっしゃったのを、妹は変り者で、お金も何も要らない、以後ご迷惑をかけるようなこともしないと言って、富山へ引き揚げたんです。妹としては親戚に富山の桜木町と言うところで、芸者家をやっている者もあることなので、二度の勤めをするつもりだったらしいのですが、さてとなると、子供もあることですからなかなかそうもいかず、わずかばかりの蓄えを食いつぶしていた訳です。ところが、今年になってからどうもからだの調子がよくない。勝気な奴なんで自分じゃ口に出して言わなかったんですが、まわりの者が心配して、無理やり病院へやったんです。それがこの二月でした。恰度富山の豪雪の最中でしたよ」
友成は一気にそこまでしゃべって言葉を切った。
「それでご病気だったんですか」
「子宮癌でした。それももう手術をしても手遅れのところまで、病勢は進んでいました」
友成は暗然と声を落した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

里洋子は友成の話を半ばまで聞いた時、彼が妹の病気を口実にして、いくばくかの金をねだりに来たのかと思った。病気が事実かどうかも疑わしいと思った。

だが、事情はもっと切迫しているらしい。

「それで手術はなさったんですの」

「しました。すぐ入院して手術したんですが、あけただけで手がつけられないで、また縫ってしまいました。それからはコバルトをかけたり、輸血をしたり、いろいろやっていますが、実は気休めなんです。当人も癌だと知って、今ではあきらめています。ただ、当人として死んでも死にきれないのは、子供を残して行くことです。わたしがしっかりしていれば、子供ぐらい何とでもしてやれるんですが、今のところわたしも失業状態で、自分の女房子さえ満足には養えない有様だもんですから…」

友成は恥じ入るように眼を伏せた。見るから甲斐性のなさそうな男なので、嘘を言っているとは思えなかった。

「妹のつもりでは、どんなことがあっても田浦さんに迷惑をかけまいと思っていたんですが、子供のために背に腹は替えられないと言う気持になったようです。何と言ってもこの世の中で、あいつが死んだあと子供の力になってくれるのは、子供の父親よりほかにありません。そこでわたしたちも妹を説き伏せて、ご主人にお願いすることを承知させたんです。奥さんにはまことに嫌な話で申し訳ないのですが、一つ妹の胸の中もお汲み取りになって、よろしくお願いいたします」

「電話でも申したように、田浦は今日北海道へ出張したばかりで、十日ぐらいは帰れないと思いますが、どうしたらよろしいでしょうか」

里津子はいつの間にか相手の立場に立って、一緒に当惑していた。
「それなんです、妹の病状がもちさえすれば、お帰りになるのを待ってからでいいんですが……」
「そんなに差し迫っているんですか」
「何しろ衰弱し切っていましてね、実際言うと二三日前から危篤状態なんです」
「まア！」
里津子は眉をひそめた。寄る辺のない幼な子を残して死んで行く若い母親の悲願に、胸を締めつけられた。
「何とか一つ奥さんのおはからいで、ご出張の途中を一度帰っていただけんもんでしょうか」
友成も必死だった。もはやこの男が善意の人間であることに、一片の疑惑を差し挟む余地もない。
「わかりましたわ、今日中にでも北海道へ電話をかけて、田浦に話してみましょう」
「そう願えれば……」
「ほかのこととはちがいますから」
「済みません、妹に代ってお礼を申します」
友成は深く頭を垂れた。
里津子は哀れな母と子のために、出来ることは何でもしてやりたくなっていた。
友成が帰って行ったあと、里津子は会社へ電話をかけて、札幌の田浦に至急連絡を取ってもらうようにたのんだ。

ところが、夕方になっても田浦からは音沙汰がない。
里津子は札幌仮事務所の電話番号を調べ、自分でかけてみた。
——常務の奥様ですか、先ほど本社から連絡がありましたので、実は今お電話しようと思っておったところです。
相手はそう前置きして、
——常務は千歳から一度此処へ見えて、すぐ旭川へお発ちになりました。旭川の宿へ連絡を取っておりますから、連絡がつきしだい直接お宅の方へお電話があると思います。
と言う答えだった。
その電話を切ると、待っていたように呼び出しのベルが鳴った。
——先ほどおうかがいした友成です、飛んだお願いをして恐縮でした。
何やらせき込み気味の友成の声に、里津子は何かが起ったのではないかと思った。
——実は今、宿にしている友達の家へ帰りましたところが、郷里から電報が来ていまして、妹の容が悪いからすぐ帰れと言うのです。とりあえず上野を今夜九時二十五分の急行に乗ろうと思いまして、たぶんご主人のお帰りまではもたないでしょうが、これも運命でやむをえません。
あきらめきっている調子だった。
里津子は何ともなぐさめようがなかった。北海道へ連絡をとっている情況をありのままに話し、
「そんな訳で、今夜中には何とか言って来るとは思いますけど、とてもすぐ引返す訳にはいかないんじゃないかと思いますの」

と、済まなそうに言った。
——わかりました、奥さんのご好意だけで妹は満足するでしょう。
友成は声をしめらせた。
その瞬間、里津子の頭に一つの考えが浮かんだ。
「どうでしょう、主人の代りにあたくしがまいったら」
——え？　奥さんが富山へですか。
「ええ、何でしたらあなたとご一緒にまいりますけど……」
——そう願えれば何よりですが、ほんとうに行って下さいますか。
「よろしかったらまいります」
——ではどうぞそうお願いいたします。
友成は心から喜んだようだった。
仕度をする時間の余裕もなかったので、里津子はほとんど普段着のままで、それから間もなく家を出た。
友成は約束の切符売場で里津子を待っていた。
「寝台が取れなくて、一等の座席指定にしました」
彼としては無理をして一等の切符を買ったのだろう。
北陸への旅は、里津子にとって生れてはじめてだった。

高崎から先は、耳馴れない駅の名が続いたが、里津子はいつか疲れて、仮睡に落ちて行った。
夜が明けると、汽車は日本海を右にして走っていた。四月も末になっているのだが、山にはまだ雪があり、朝曇りの海は冷たく白い色だった。
富山へは七時少し前に着いた。
「ちょっと時間が早いですが、病院へまっすぐ行って下さいますか」
「ええ、まいりましょう」
自分自身の思いつきに感動した恰好で、此処まで来てしまったものの、いざとなると、友成早智子と言う女と会うのが、里津子は少し恐くなっていた。自分は田浦の妻のような顔をしているが、実は単なる傍観者に過ぎないし、傍観者だからこそ早智子と会う気にもなれたのだ。
「病院は富山の西の外れに近い五福と言うところにあるのです」
友成はそう言って、駅前からタクシーに乗った。
道路の広い清潔な感じの市街をしばらく走り、大きな川を渡ると、その辺から風景は郊外めいて来た。
野球場があったり大学の建物があったりして、やがて車は病院の前に停まった。
「済みませんが、ちょっと此処で待っていて下さい。先に様子を見て来ますから」
友成は里津子を玄関に待たせて、あわただしく病棟の廊下へ消えて行った。
里津子は早智子が死んでいたらどうしようと思い、生きているなら生きていてで、何と言ったものだろうと思った。来るのではなかったと言う気がした。

かなり長いことかかって、友成がもどって来たが、その顔色には、最悪の事態の起っていないのが感じられた。
「持ち直したようです。意識もはっきりしていますが、会ってやってくれますか」
里津子がうなずくと、友成は先に立ちながら、
「奥さんが来て下さった事情をあらまし話したところが、涙ぐんで感謝していました。まア一時は持ち直してもどうせ駄目なんですから、来ていただいてよかったと思います」
「そばにはどなたかいらっしゃるんですの?」
「伯母がいます。その伯母がこの土地の桜木町と言うところで、芸者置屋をやっているんです」
一つの戸口の前で、友成は足をとめた。
「友成早智子」と書かれた札の下に、面会謝絶の赤札が下がっていた。
「どうぞ」
友成がドアをあけた。
里津子は病室に歩み入ったが、ベッドの上の患者を一と目見て、胸が痛くなった。
痩せ細ってからだの薄くなった女が、そこに仰臥していた。
病人は黒くくま取られた眼で里津子を迎え、かすかにうなずいて見せた。酸素吸入の管が絆創膏で頬にとめられ、鼻孔にあてがわれていた。
「田浦さんの奥様だよ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com